【昭和11年創刊】昭和20年11月13日第3種郵便物認可 ©毎日新聞社2021（日刊）

2021（令和3年）1/22 金曜日

毎日小学生新聞

MAINICHI
発行所 毎日新聞東京本社
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
配達お問い合わせ 購読お申し込み
0120-468-012
（6－21時、一部地域は平日10-18時）
定価 1か月1750円（本体1620円、消費税130円）・1部70円

毎日小学生新聞編集部
郵　便 〒100-8051（住所不要）
ファクス 03-3212-2591 電話03-3212-0321
メール maishou@mainichi.co.jp

点字新聞のしくみ

全もうの記者・佐木さんに取材！

点字が日本で使われ始めてから130年。1月22日オンラインで大阪にある毎日新聞社点字毎日部にワタのチビッコ記者がおとずれました。点字新聞の作り方をみたり、へんしゅう部の全もうのへんしゅう部員佐木さんにインタビューした事をほうこくします。

私は点字を発明したルイ・ブライユさんの伝記を読みこの体けんにさんかしました。私は点字新聞を発行しているのはなんと日本だけということにおどろきました。また有名なヘレン・ケラーさんも新聞社に来たそうです。点字には漢字がないので同音意義語はむしのようにそらのようにものように説明を加えて書くそうです。

へんしゅう室では点字へんかんソフトを使って記事を書いたり、全もうの記者さんが「しょく読」といって、点字をさわってまちがえがないかチェックしていました。私は「写真がないのに文だけで伝えられるんですか？」としつ問しました。佐木さんは「色や大きさなどを文でくわしく書いているし、目の見えない人にとっては、写真がないことがふつうなんですよ。」と教えてくれたのでびっくりしました。

また、調べたり取材をしていけたらいいなと思います。

【藤井 結子】

伝書鳩の思い なるほドリへ

毎日新聞東京本社は、緑豊かな皇居のほとりにある。本社が入るパレスサイドビル（東京都千代田区一ツ橋）の屋上には、6羽のハトの像が置かれている。ビルの設計者からの依頼で制作されたというが、なぜハトの像なのか。

今のように交通や通信が発達していなかった100年ほど前、「伝書鳩」は新聞社にとって重要な通信方法だった。「伝書鳩」はハトの帰巣本能を活用。東京の各新聞社では100羽以上のハトを屋上で飼っていた。取材現場から原稿を送るときは、ハトを数羽つれていったという。記者は通信用のうすい紙に記事を書き、長さ4センチほどの筒に入れてハトの足につけて放った。写真フィルムは長さ10センチほどの筒に入れ背中にゴムバンドで背負わせた。ハトが新聞社にもどるとハト係が記事や写真を担当に渡した。ハトたちは原稿やフィルムを何百キロメートルも運んだ。

ハトには成績表がつけられ、成績が優秀なハトほど出動回数が多かった。成績が悪かったハトは、運動会を盛り上げるためにくす玉から飛び出す役をつとめたという。

毎日新聞では、東京オリンピックの次の年（1965年）まで大活躍した。「なるほドリ」の尊敬するトリは伝書鳩。ハトたちのがんばりは今も受け継がれている。

背中に写真フィルムをいれる筒を背負った伝書鳩。原稿は脚の筒に入れた。新聞社に戻る時、タカに襲われる危険があり、複数の伝書鳩が同じ原稿メモを運んだ